平成23年2月1日発行（毎月1回1日発行）
昭和49年10月15日第三種郵便物認可

明日を創る医療総合誌

CLINIC magazine

2011 FEB 2

No.499

［特集］

プライマリ・ケアで診る 高齢者の過活動膀胱

高齢者におけるOABの治療
名古屋大学大学院 後藤百万氏

夜間頻尿の病態と治療
福井大学 横山 修氏

認知症とOAB
東邦大学医療センター佐倉病院 榊原隆次氏

［新連載］

医療連携最前線2011

対談シリーズ 維新の蘭学医 関寛斎からのメッセージ

第2回（5回連載）

蘭学と漢方

～長崎で蘭学修行し漢方にも傾注～

長尾クリニック院長　長尾和宏氏 vs. 参議院議員・医師　梅村　聡氏

濱口悟陵の経済援助を受け長崎でポンペに学ぶ

長尾　関寛斎は佐倉順天堂と長崎で蘭医学を学びますね。寛斎の時代の医学とは、どのようなものだったのでしょうか。

梅村　東の佐倉順天堂と西の大阪・適塾が、当時、蘭医学の塾として並び称されていました。緒方洪庵が開いた適塾は大阪大学医学部の前身で、今年は緒方洪庵の生誕200周年です。ちなみに関寛斎は生誕180周年です。

適塾と佐倉順天堂の違いは、一言でいえば、前者が座学中心であり、後者は実地診療中心であったということのようです。関寛斎も佐倉順天堂時代には、20歳で『順天堂実験録』を書き、21歳で鼻の骨のヘルニア手術、同じく21歳で日本最初の膀胱穿刺手術を行いました。

長尾　どちらかといえば、外科中心ですね。

梅村　佐倉順天堂を出たら、普通は町医者になるのです。関寛斎もそうだったのですが、30歳のときに長崎に留学します。これは、銚子で開業医として活躍していた時代に、醤油業を営む濱口悟陵（現在のヤマサ醤油当主）と知り合い、援助を受けることができたからです。

長崎でオランダ人医師ポンペの下で蘭学を勉強するのですが、当時の一般的な医者の感覚からすれば、正直言って変わった人だと思います。当時の日本の医療の中心は漢方でした。佐倉順天堂は蘭学ですが、町医者としてやっていくなら、さらに長崎で直接、オランダ人医師に学ぶ必要もなかったはずです。役に立つかどうかわかりません。ともかく、ポンペの下で2年間、蘭医学を学ぶのですが、これが寛斎の将来に大きく影響することになります。

現代の若い医師はどうでしょうか。新研修医制度に移行してからは、研修医はたとえば実験することを嫌がります。「それより専門医資格取得に役立つ勉強をしたい」と。

■ 関 寛斎の経歴

西暦	満年齢	
1830	0	上総国山辺郡中村（現在の千葉県東金市）の農家吉井家の長男として生まれる。
1843	13	前之内の関俊輔と正式に養子縁組。
1848	18	佐倉順天堂に入学。佐藤泰然に師事。
1852	22	佐倉順天堂を修了し、前之内で開業。結婚。
1856	26	銚子で開業。 この頃、コレラ流行し、防疫活動。
1860	30	長崎留学。オランダ人医師ポンペに師事。
1863	33	徳島藩の御典医になり、徳島に移住。 御典医として活躍。
1868	38	明治維新。戊辰戦争に軍医として従軍。奥羽出張病院頭取。
1869	39	徳島藩医学校一等教授、病院長に就任。
1872	42	山梨病院長。検梅法を発表して実践。
1873	43	徳島へ戻り、関医院開業。
1875	45	徳島新聞に養生心得を発表。 町医者として徳島で活躍。貧者の無料診療や種痘にも取り組む。
1902	72	北海道の斗満原野（現陸別町）へ移住。 農地開拓と町医者として住民の診療を行う。
1912	82	子孫から財産相続訴訟を起こされる。
1913	83	服毒自殺。

蘭学と基礎医学の勉強が一緒かどうかは別にして、いまの若い医師は寛斎がしたような寄り道を嫌がる傾向があります。これは日本の医学医療の将来を見通すと、よい傾向であるとは思えません。

長尾　そうですね。医師はいろんな場面に遭遇しますから、いろんな力が要求されます。私も昔、博士号欲しさに「何の役に立つんや」と思いながら試験管を振っていたクチですが、実際、そうした経験が後で役に立ちます。医学の研究はこうして行われるということを、身をもって知ることができるのですから。

長崎で蘭学を学ぶといったら、いまでいえば遺伝子治療と同じような先端医学だったのではないかと思います。好奇心、探究心が強い人だったのは間違いないでしょう。いまの若い世代は基礎医学を一生懸命やっても、お金にはなりませんが、それが自分の血となり肉となることがなかなか理解できないのでしょう。

梅村　寛斎も長崎に行ったときには、最初は蘭学が日本の主流になると意識していなかったと思います。

関寛斎は、官軍の野戦病院長や徳島藩医学校の一等教授、徳島藩病院の病院長も務めますが、人生の大半を町医者として過ごします。最後も町医者です。町医者が先端医学を学んだことに意義があります。

長尾　そう思います。町医者という存在は庶民のためにあるのですが、町医者こそ先端医学を知っていなければなりません。

たとえば、現代の肝移植はどういうシステムで行われるのか、どういう状態であれば適応があるのか、そういった知識があって、初めて患者さんが紹介できるわけです。自分で移植手術ができなくても、勉強しておくことが非常に大事です。それが人の命を救うことにつながるのです。

梅村　そうなんです。若い医師が研究しないのは「自分の役に立たない」と思うからですが、本来は中心に「患者さんの役に立つ」という考えがあるべきです。そうなると、基礎医学や最先端医学に関わり、知識を得ることは非常に大事になってきます。

もう1つ、基礎医学や最先端医学は誰がやってもいいのです。日本の将来のために、誰かがそれを継いでいかなくては、20年後ぐらいの日本の医療水準は世界に大きく遅れをとってしまうと考えられます。

長尾　基礎研究は私的な興味、好奇心が原動力となっていますが、半分でも4分の1でもいいから、将来の医療や患者さんの役に立つというパブリックな意識を持ちながら進めることも大切ですね。

最先端医学を学んだからこそ伝統的な医学を評価

梅村　蘭学と漢方の話に戻りましょう。長尾先生は日常診療で漢方薬を使いますか。

長尾　私はよく使います。漢方でしか治せない病気も存在します。たとえば、咽頭神経症はのどの閉塞感を伴う疾患で、西洋医学では治癒させることは困難ですが、半夏厚朴湯がよく効きます。

■ 写真1　長崎留学時代の関寛斎

梅村　漢方の世界で梅核気といわれている病気ですね。

長尾　漢方薬以外に代わる薬がないのです。こむらがえりに対する芍薬甘草湯もそうです。更年期障害に対する加味逍遙散や桂枝茯苓丸も、ホルモン補充療法とは違った作用で治療できますから、ほかに代えられないものです。わが国で使用されている漢方薬は日本で独自の発展を遂げたもので、品質も非常に優れています。

残念ながら、知らない人は怪しげなものと見てしまうことがあるわけです。

梅村　関寛斎は佐倉順天堂、長崎で蘭学を学びましたが、後には漢方、つまり東洋医学に非常に力を入れています。当時は漢方医と蘭学医が入れ替わる時期でした。幕末から明治にかけての急激な西洋化によって、

■ 写真2　関寛斎が使用していた人頭骨標本

蘭学医が漢方医を駆逐したわけです。蘭学の最前線にいたのが関寛斎だったのですが、彼自身は心のなかでは「患者を救うのは蘭学だけではないな」と感じていたのだと思います。

というのは、折につけ東洋医学的な考え方を世間に広めようとしているからです。

私は、これは寛斎に最先端の医学を学んだという自負があったからこそ、素直に昔の医学のいい点を評価することができたのだと思います。いま、「漢方なんてとんでもない」とおっしゃる医師には、中途半端な西洋医学しか勉強してこなかったのではないかと感じます。

長尾　まさにそうですね。たとえば、日本統合医療学会の理事長を務めておられる渥美和彦先生は東大で人工臓器の研究をされていたのですから、最先端の医学を究めたうえで、伝統的な医学のいいところを取り入れようと主張されているわけです。

漢方は西洋医学と違って単一物質ではなく、いくつもの物質の和、あるいは体内の調和をうまくとって治していこうという考え方です。近代的な医学を究めた人ほど、そうした考え方をうまく活用していこうという境地に至るのかもしれません。

梅村　医学医療の世界では、狭い世界のなかでグループが作られ、それぞれが他を批判しているという面があります。寛斎は、それぞれのいい面を評価して交通整理できる人がエリートなのであって、1つの分野だけに固執している人は本当のエリートではないと言いたいのではないでしょうか。

長尾　実地臨床でも、西洋医学と東洋医学を使い分ける、あるいは併用するというのが患者さんのためになると感じます。わが国では、国民皆保険制度のなかで漢方薬の保険償還が認められているのは喜ばしいことです。ときどき、それを外すといった議論もありますが、漢方薬のメリットは薬価が安いことです。経済性の面も含めて考えていただきたい。たとえば、リウマチの治療薬では何十万円という新薬が登場してきていますが、そうした新薬と漢方は役割が違い、薬価もたかだか何十円です。

保険の審査の話では、昔は新薬と漢方を併用すると「どちらか一方にしなさい」というコメントが返ってきましたが、最近はなくなりました。実地臨床のなかで役割が理解されてきたのではないでしょうか。本来、医療とは、いくつかの選択肢のなかからいいところを取って組み合わせていくものでしょう。

梅村　前回の事業仕分けで、漢方を保険から外す話が出てきましたが、財務省主導で医療費抑制の考えだけで出た話です。民主党の政治家は私も含めて、それを撤回させる方向で動きました。少なくとも厚生労働関係議員では、当時の足立信也政務官をはじめとして、漢方外しに賛同した者はいません。

2年で終わった長崎留学を後年になって後悔した

長尾　関寛斎の長崎留学の続きを聞かせてください。

梅村　留学時代に『七新薬』という最新の薬の事典を共同で執筆・出版したりしますが、留学は実は2年間で終わっています。後々、70～80歳代になってから寛斎はそのことを後悔しています。濱口悟陵から「お金は出すからもっと留学すればいい」と言われたのですが、断ったのです。

長尾　なぜ、後悔したのですか。

梅村　明治時代のわが国の医学は、蘭学からドイツ医学にシフトしますが、寛斎はその流れに乗ることはできなかったのですね。

「あのときにもっと長崎にいれば」と、70歳を超えてからもずっと言い続けていたそうです。

「若いときの苦労は買ってでもしろ」という言葉がありますが、面白い学問を続けられる環境があるのなら続けたほうがいいと、寛斎が自分自身の選択を反省して言っているのではないかと。医師として私は、後年の寛斎の後悔を興味深く感じます。でも、もっと長く留学していたら、その後、北海道を開拓する壮絶な人生はなかったかもしれませんね。

【写真提供：北海道陸別町関寛斎記念館】

◉ 次号は、第3回「御典医から軍医へ～維新の在宅医療と救急医療～」をお届けします。